

本多静六通信

第16号

発行
本多静六博士
を記念する会

公園設計に当って

本多静六が考えたこと

お茶の水女子大学名誉教授 遠山 益

一 はじめに

本多が日比谷公園の設計を引き受けたことは、唐突な出来事であった。彼は造園を専門的に研究したことも、実際に公園を設計した経験もなかったからである。かような羽目に立ち至ったのは、善くいえば彼の天性の積極性によることであり、悪くいえば彼のお節介やきのなせる業であった。

本多の著書によると、明治三十二年頃辰野金吾博士（建築学の権威者）は日比谷公園の設計を東京市から依頼されて、苦慮しておられた。博士がたまたま本多と話す機会があったとき、公園設計に話が及んだのは、巡り合わせというものであった。博士はこの仕事から早く解放されたいと望み、若い本多を説得して、早速東京

市長に彼を推薦してしまった。本多はこれを引き受けるに当って、大きな不安を抱いたが、三十代の若い教授は、自分の名を社会に知ってもらう絶好の機会と考え、名利を蓄える方が不安に勝ったのである。

一旦引き受けたからには、彼は持ち前の積極さで、体を張って邁進した。幸にも本多の設計案は市議会で承認された後は、彼は自ら施業の現場に立ち、人夫たちの陣頭指揮に当った。このような本多の態度は、象牙の塔に立て籠る学者先生には真似のできないことで、実学を重んじ、人生即努力を人生訓として生きた本多の面目躍如たるものがある。

いよいよ開園となった明治三十六年六月二日の各新聞記事は、初めてみる洋風公園を大方好意的に受け入れ、設計施行に当った委員たちの労をねぎらっている。

さて、日本初の洋風公園を開設するに当り、関係者や本多は公園の存在や設置に対して、如何なる哲学をもっていたであろうか。日比谷の公園地はかつて諸大名の屋敷であったが、明治

二十二年「東京市区改正計画」に際して、官有地の利用法の一つとして、公園計画が急浮上したという。したがって、東京市議会や市行政委員らは、公園開設の目的やその存在意義について、十分審議する余裕はなかつたろうと思われる。

一方、本多ら造園関係者らは、如何にして洋風らしい公園を造成するかで念頭は一杯であったに違いない。当時本多が書いた公園設計案や公園設置に関する著作をみても、造園の技術的内容が主で、公園設置の目的や必要性、あるいはその存在意義などについては触れていない。明治時代のわが国では、国民も社会全般も公園設置の意義や必要性が未成熟状態にあったのだから、これを考慮することなしに、公園設置に踏み切ったことは止むを得ないことといわねばならない。

二 西欧における公園設計の思想

ところが、欧州諸国では十九世紀中頃から、一般市民のための都市公園がつきつきと開園され、しかもその公園開設の目的は明確であった。しかし、本多らの造園技術者、市行政委員らは、英仏独などの公園開設目的を検討し考慮することはなかつたようである。以下に英の場合の都市公園開設の背景と思想を手短に紹介する。

十八世紀産業革命が始まると、求められて都会に集中した労働者は低賃金で苛酷な労働を強いられた。そのため都市生活における貧富の差



須坂市臥竜公園 根あがり、ねじれ松(天然記念物)

は拡大した。そこでロンドン市当局は健全な慰楽と快適な生活環境を提供する計画を立て、実行しつづつあった。

一方、英国議会でも労働者階級の生活環境の改善は政治的にも避けて通れない問題となり、ついに公衆衛生法の制定(一八四八年)へと発展した。この法律は貧困と劣悪な生活環境にある人びとにとって、「公共の遊歩地」と「健康保持および慰楽」が必要であるとして、国や公共団体の手によって、これらを整備しようとするものであった。

ちょうどこの頃、欧州諸国はコレラの流行に

よって大打撃を受けた。イギリスだけでも約二十万人の死亡者が出たが、その多くは生活に困窮している労働者階級であった。このような社会的背景のもと、イギリスでは非衛生的な貧民街の生活環境を改善するため、老朽化した住宅から低所得者を解放し、平等に生活を楽しむ機会と場所とを、すべての市民に与えねばならないとする人道主義が勃興した。この思想こそが、イギリスにおける近代都市公園の開設を促進する原動力になったのである。そしてこの思想のもとで、ロンドンの東部の市民にはビクトリア公園が、西部の人びとにはバッターシー公園が開設されたのであった。

一方、十八世紀のフランスの思想家たち、ルソーやボルテールらの哲学は「自然への回帰のすすめ」であった。この思想はフランス大革命に、またその後のパリの都市計画における公園づくりにも大きな影響を与えることになった。他方、ドイツは当時多数の小公国であったものをドイツ帝国に統一するため、民衆を啓蒙する必要があった。啓蒙の目標は愛国心育成の教育であり、公園をその教育の施設と位置づけたのである。

仏独の今に残る大公園の設置思想の詳細は割愛する。とにかく、わが国初の洋風都市公園として日比谷公園が開園する半世紀以上も前に、英仏独では上記のように、公園設置の思想や哲学が明確に表明されていたのであった。わが国がこれら先進諸国を模倣し、これに追従するこ

とになるのは、五十年以上も経ってからのことである。

三 本多の公園設計思想の変遷

日比谷公園の設計施行に成功した本多のもとには、全国の府県や市町村から、公園の設計や改良の依頼が相次いだ。その数は五十箇所をはるかに越えるほどである。これらの設計案や改良計画案を検討すると、本多の公園設置に対する見解の変遷をたどることができる。代表的ないくつかの公園をとり上げて、それを検討してみる。



会津鶴ヶ城公園 高石垣から二の丸を眺める

日比谷公園の設計から大正時代前期までの公園設計案の中では、公園設置の目的その意義等について全く触れていない。例えば大正六年、福島県の「若松公園（現会津鶴ヶ城公園）」の設計案の緒言は十行足らずの短文で、公園設置の目的等はなく、会津地方の伝統、風俗、習慣、文化、歴史、経済、交通などの蘊蓄がないと、



大宮公園 アカマツ樹林



小諸懐古園
大ケヤキ(樹齡推定500年)

満足な公園設計はできないと記している。だけである。本多の念頭には、公園設置の必要性に関する哲学は芽生えていたであろうが、当時の一般民衆や社会全体には、まだそれは無縁のものであったかもしれない。

しかし、大正中期になると、本多の公園設計案には、公園の必要性和目的の一般論が記されるようになる。大正十年の「埼玉県氷川公園改良計画」の緒言には、「(前略)・・・田園生活、天然生活の要望せらるるは当然の現象にして、匆忙(そうぼう)繁雑を極むる都市住民が、いかに都市を脱れて平和の境に変化ある生活を渴望するかは想像の及ばざるものあり。(中略)就中(なかんずく)東京市民がその日常生活における心身の過労、神経の興奮また衰弱を癒せんがため、好適地を近接の地に求めつつあること、郊外に杖を曳くもの近時頓(とみ)に激増せるに依りても、之を知る得べし。(後略)」とあって、近代文明社会において、心身ともに疲労した人間を解放するには、公園は不可欠であるとされた。この論旨は半世紀以上も前、英仏独などで表明した都市公園開設の必要性の流れを汲むもので、公園開設に共通した一般論といえる。

ところが、大正末期になると、公園設計案の緒言に本多自身の人生哲学から生まれた独自の思想が明記されるようになる。すなわち、大正十五年の長野県小諸公園(懐古園)設計案と、同年同県の須坂公園(臥竜公園)設計案には、

ともに数頁にわたる長文の緒言があり、次のような本多の哲学が述べられている。

「今日世界文化の大勢は独立自強である。この独立自強には身体が丈夫でなければならぬから、必然の結果として健康第一主義となり、名譽や富よりも、学問やなによりも各人の健康を第一に置くことになった。(以下略)」

この独立自強の思想にもとづき、彼が公園の設計施行に当って最初に実施したことは、民衆のために野外の健康増進設備、具体的には園内に休養区、運動区、教化区、逍遙区を設けて、各区に適った諸設備をつくることであった。第二は公園地域を美化し、その地の風土、植物などに順応調した設備をつくる。第三に、それぞれの公園は個性と特徴を具えているべきで、そのためには設計者は常に創造的でなければならぬと説いた。

最後に、本多の公園設計の哲学とは問われれば、それは「独立自強」とであるといえる。本多は社会的な名譽や地位を得得てからも、彼の心も日常生活も一般民衆の一人であった。それは少年時代から頑健なからだに恵まれ、苦学に耐え、ひたすら人並はずれた努力の連続によって、苦難を克服してきた体験が、彼の人生の根底に潜在していたからである。人間が幸せな生涯を生きるのは、何よりも健康が第一であるとの考えに立ち、民衆の健康と幸せの増進に貢献することこそが、本多の公園設置の最大の目的であった。

復刊ベストセラーの仕掛け人が見た 本多静六のいま

実業之日本社
書籍管理部部長・編集長 岩野裕一

知る人ぞ知る存在だった本多静六の名が、このころマスコミをずいぶん賑わせている。書店には各社から出版された本多静六関連の新聞書が数多く並びようになり、時ならぬ「本多静六ブーム」は朝日新聞をはじめ、新聞や雑誌でも何度となく取り上げられた。

その直接のきっかけとなったのは、二〇〇五年七月に、老舗出版社である実業之日本社が『私の財産告白』『私の生活流儀』『人生計画の立て方』の三点を一挙に復刊したことである。

刊行から半世紀以上を経たこれらの本が、誰もが予想しなかったようなベストセラーとなつたことで、本多静六に対する関心が急上昇したわけ



だが、「なぜいま復刊を企画したのか、その背景や出版業界の裏話を紹介してほしい」とのご依頼を『本多静六通信』のご担当者からいただいた。本来、編集者というものは黒子に徹するべきなのだが、せっかくの機会でもあり、長いあいだ本多静六翁の偉業を顕彰して下さった皆様への感謝を込めて、この一文を書かせていただくこととした。

生きる意味を、先人の知恵に求める
編集者が企画を立案するきっかけはさまざまだが、ひとつ肝心なのは「時代の空気」を読むことにあると思う。

景気は回復したといいながら大多数の人には実感できず、世の中に閉塞感が漂いつつある中で、人生の意味や生きる上での指針を求める人々が、その答えを書物の世界、とりわけ古典や先人の知恵に求めるようになってきたことは、編集者としてここ数年実感してきたことである。そんなとき、若い世代の経営者や経営コンサルタントが集まる会合で、本多静六の名前を何度も耳にするようになった。

やや意外に思われるかもしれないが、いまの若い世代で頭角を現している人たちは、みな勉強家であり、読書家である。そして、ある程度の経済的な成功を勝ち得たのち、物質面の成功と人生における幸福をいかに両立するか、という課題に直面したときに、彼らが見出したのが本多静六という存在だったのである。

実は数年前、日本経営合理化協会が、本多静六の『私の財産告白』をはじめとする三部作から再編集した『人生と財産』という豪華本を出版しており、一万円を超える高額にもかかわらず、一部では評判となっていた。だが、若い世代では手を出しづらいとの声にもあと押しされて、原著の版元である実業之日本社で編集を手がける者として、復刊を決意したのである。

実業之日本社と本多の深い縁

実業之日本社と本多静六の関係は古く、遠く明治中期にまでさかのぼる。ことし創業一〇周年を迎えた実業之日本社が、本多の著書『林政学』を刊行したのは、創業の年である一八九七（明治三十）年のことであった。創業者の増田義一は東京専門学校（現在の早稲田大学）の学生時代、本多静六の出講する林政学を熱心に受講しており、読売新聞記者を経て出版社を創業してからは、本多を人生の師と仰いで、なにくれとなく相談に乗ってもらっていたという。

本多はかねてから、講談社の創業者である野間清治と、実業之日本社の増田義一を出版人として高く評価していた。そして、増田義一が一九四九（昭和二十四）年に世を去つたのを弔うかのように、翌五〇年、かの名著『私の財産告白』が実業之日本社から出版される。戦後の混乱した世相のなかで、本書は当時からベストセラーとなり、五一年には続編というべき『私の生活流儀』を刊行。こちらも好評をもって迎え

られるが、「百二十歳まで生きる」と豪語していた本多が翌五二年一月に八十五歳で急逝したために、戦前すでに脱稿していた『人生計画の立て方』を續いて追悼出版し、本多静六のいわゆる「三部作」が完成したのである。

これらの著作の復刊は今回が初めてではなく、これまで数十年おきに復刊されていた。だが、生前の本多を知る人が減ることに売れ行きは落ちており、今回の復刊にあたって「果たしてこんな古い本が売れるのか」と危惧する声が社内外にあつたのも事実だった。

そこで私は一計を案じた。若い経営者やビジネスマンのあいだで本多静六が評判を呼んでいるのであれば、その世界で熱烈なファンをもっているカリスマ的な存在に、本多の教えの魅力を伝える宣伝マンになつてもらえばいいではないか、と。

人気の書き手を解説者に起用

具体的には、復刊する本多静六の本にそれぞれ長めの解説を付することにして、『私の財産告白』には経営コンサルタントの岡本史郎氏、『人生計画の立て方』には会社経営者で作家の本田健氏を解説者に起用、いっぽう『私の生活流儀』には、自他共に認める本多静六の応援団長である重鎮、渡部昇一・上智大学名誉教授に解説をお願いした。岡本氏、本田氏ともに一般的な知名度は低いかもしれないが、若い世代からの支持率はきわめて高く、お二方ともに著作

を出せば必ず十萬部以上のベストセラー、という人気の書き手である。

また、復刊にあつてはカバーに初出当時の装画を生かすなど、オリジナルの味わいを残しつつも、本多静六の写真を加えたり、誤植や誤記を訂正したのち読みやすい活字でページを組みなおすなど、いまの読者にも受け入れられるよう細心の注意を払つたのはいうまでもない。加えて、本多静六の嫡孫である本多健一・東京大学名誉教授に全体の監修をお願いし、快諾を得たのも心強かつた。

そして、二〇〇五年七月に各冊初版八千部でスタートしたところ、岡本史郎氏や本田健氏が自ら運営するホームページやメールマガジンで紹介してくださったことが起爆剤となり、最初はオンライン書店（アマゾン・ジャパンなどインターネット上で書籍を購入できる書店）で売れ行きに火がつき、それから全国の書店に波及して、半年間で累計十萬部を超える隠れたベストセラーになつたのである。

こうした動きを敏感に察知したマスコミ各社が、版元である実業之日本社や、監修者の本多健一先生、あるいは蒲蒲町の関係者などに取材してくれたことによつて、さらに話題となつたのも幸いした。かくして本多静六の存在は、二十一世紀の世に大きく甦つたのである。

本多の生き方はサラリーマンの Handbook

これまでも、わが国では明治以来、経済的な

成功を収めた偉人の処世訓や自伝が多数出版されて、多くの読者の関心を集めてきた。わが実業之日本社にしても、松下幸之助や本田宗一郎など、日本を代表する経営者のこうした本を手がけてきた歴史がある。

だが、本多静六のように、大学教授という本業を持ちながら、その一方で財をなした人、つまり「サラリーマンの成功者」がその秘訣を説いた本というのは、まったく存在しなかつたといつてもよいのではないか。

これまでの時代であれば、そこそこの企業や組織に就職さえできれば、あとは一生家族を養い、老後も年金でなんとかが暮らすことも可能であつた。だが、わずかに数年にしてこつた日本社会の安定した基盤は一気に消え去り、誰もが将来に不安を抱き、経済的に自己防衛しなければならなくなつてしまつたとき、実のところ勤め人にとつて財界人の成功談では、具体的な助言にはならなかつたのだ。

そこで、本多静六が読み直されたのである。しかも本多の説く内容は、「四分の一天引き貯金」にせよ、家庭円満の術にせよ、きわめてシンプルかつ当たり前のことでありながら、人間にとつての基本であり、いまなおまったく色褪せることがない。あたかも人生経験豊かな老人が、子や孫に教訓を諄々（じゆんじゆん）と説くかのような平易な内容であり、その温かな人柄を感じさせる語り口もあいまって、若い世代が本多静六の叢智にすぎるのもむべなるかな、である。一冊読

んで、さらにほかの二冊も、という読者が多いのも、このシリーズの特長であった。

この好評に力を得て、続いて二〇〇六年二月に復刊したのが『本多静六自伝 体験八十五年』だ。これは、本多が死去する直前の五二年一月に講談社から出版された『本多静六体験八十五年』を再編集したもので、そのままの内容では前三冊との重複があり、分厚くなり過ぎて価格も高くなってしまったため、若干内容を割愛して復刊した。こちらの解説は、やはり若い世代に人気のコンサルタントで、作家としても大活躍している神田昌典氏をお願いした。



「人間としての品性を高めるためには、過去の先輩に学ぶことが大切です。いったい私は何を信じて生きていけばいいのかと、自分自身の軸が揺れているときこそ、世相に振りまわされない本多静六の生き方を学んでほしいものです。」

林学者としての業績も出版

この間、本多静六ブームにあやかろうと、各社が相次いで関連書籍を刊行した。〇五年九月には早くも三笠書房が本多静六著『東京帝大教授が教える お金・仕事に満足し、人の信頼を得る法』を復刊、同社は〇六年十月に『本多静

六のようになりたいなら、その秘訣を公開しよう』『日本一の幸福者』の“成功習慣”づくり』も復刊している。また、一種の便乗商品として、本多の著作を抜粋した『本多静六人生を豊かにする言葉』（イースト・プレス）、『本多静六一日一話 人生成功のヒント366』（PHP研究所）も相次いで出版されたが、この二点は同じ編者による同じコンセプトの書籍が別々の版元から出たものであり、そのたくましい商魂には本多静六も思わず苦笑していることである。

というのも、本多静六は死去してからすでに五十年が経過しているために、著作権の保護期間が過ぎており、誰でも自由に出版できる状態になっているのだ。ただし、著者の人格権については永久に保護されなければならない、という判例もあり、本を作る側が本多静六およびその著作への敬意を忘れてはならないことは、改めて言うまでもない。

そのために、「蓄財の神様」としての本多静六だけでなく、自伝を復刊することでその生涯を広く知らしめると同時に、氏の本業すなわち「林学者としての本多静六」の姿もきちんと記録しておかなければならない、という義務感が、編集者である私と実業の日本社に生じたのは、はなはだ自然な成り行きであった。そんな折に、本多の縁戚でお茶の水女子大学名誉教授の遠山益理^{マサヒコ}学博士から、「これまで長年取材してきた本多静六の業績を、一冊の本にまとめた

い」というお申し出をいただいたのである。かくして〇六年十月に出版されたのが『本多静六 日本の森林を育てた人』である。本業である林学者としての業績に光を当てた初の書き下ろし評伝で、鉄道防雪林、水道水源林、日比谷公園、明治神宮など、現代の私たちの生活に深く密着している本多の偉業を紹介したこの本は、良書として高い評価を受けている。



本多静六という巨人の全体像は、本書の完成ではじめてひとつに結ばれたといっても過言ではないだろう。本多静六の生誕百四十年という節目に、歴史・自然科学の両面から本多静六を再評価した一冊を世に問うことができたのは、なにより嬉しいことであった。

だが、こうした仕事を成し遂げることができたのも、そもそもは本多静六の業績を後世に伝えようと長らく努力してきた、地元の方々のおかげである。とりわけ中山登司男菖蒲町長や総合政策課の皆さん、町史編さん室の渋谷克美氏には、ひとかたならぬお力添えをいただいた。本稿をしめくくるに際し、とくに記して感謝申し上げると同時に、近代日本が生んだ最良の日本人のひとりである本多静六が、今後さらに広く知られるよう、微力ながらお手伝いしたい。

市内を一望する桜の名所 福井県越前市・芦山公園

高蒲町 渋谷克美

寄贈された山を公園に、今では県下有数の桜の名所に

「芦山(ろざん)公園」は、福井県のほぼ中央、人口約八万八千人の越前市(旧武生市)にある。旧武生市は、水上勉の代表作『越前竹人形』の舞台となった所としても有名である。平成十七年十月に合併して誕生した越前市は、文化財の保有数と製造品出荷額が共に県下一位という、歴史と文化と工業のパラノースのとれた地方都市として発展を続けている。

この地に、本多静六設計による芦山公園が造られたのは、約八十年前の大正十三(一九二四)のことである。芦山公園は、市役所の東方、日野川を挟んだ向いにあり、JR武生駅から徒歩十分と交通の便もよい。地元では、「村国山公園」あるいは単に「村国山」と呼んでいる人も多いようである。

この公園は当時武生町に住む一人から公園用地として武生町に寄贈された「山」を、本多静六が設計して公園としたものである。

芦山公園は、本多静六の公園設計が「改良設計」が多い中で、「新設設計」によりできた比較的珍しい公園でもある。新設設計という点で

は日比谷公園や大濠公園(福岡県)と並ぶものである。

インターネットで「芦山公園」を検索すると、「山と川のみを兼ね備え四季を通じ市民の憩いの場に、染井吉野が二千本咲き誇る」「日野川を挟んで越前市街の東にある山、市街地に近く、眼下に日野川の清流を見渡せる。四季を通じて市民の憩いの場」といった案内文が出てくる。

筆者は約十年前に『福井県武生芦山公園設計図及説明書』(大正十四年十二月、以下『説明書』)を入手し、以来ずっと興味を持ち続けていたが、今回ようやく念願叶い、この地を訪れることができた。芦山公園の調査にあたっては、事前調査を含め、越前市役所の方々には大変お世話になった。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

地元に残る資料を探して、越前市へ

芦山公園、そして越前市を訪問するにあたり市役所の公園担当課と市立図書館へ関係資料について問い合わせをさせて頂いた。具体的には、大正時代の新聞資料の有無や郷土史資料について、さらに現在の芦山公園の平面図等の送付についてお手を煩わせた次第である。

こうして、平成十八年十一月二十三、二十四日の二日間に亘って、芦山公園と越前市立図書館を中心とした調査を行うことができた。

本多静六が芦山公園の設計を手がけた大正十三年当時、本多は既に国内の多くの公園の設計

を手がけていた。名実共に公園設計の第一人者として名声を博していた時期である。そうしたこともあってか、『説明書』の中に他の公園設計書ではあまり見ない記述を発見した。公園の「改悪設計」についての記述である。

例えば、本文「前論」の「森林公園の必要と其の設備」の中で、「近年、各地の公園設計をみるとややもすると歩道によって折角の公園を著しく悪化させているものがある」とか、「多くの地方公園の中には森の下を掘り起こし、日陰の用をなしている樹木を伐採して、その代わりに小さい桜や楓を列状に植えているところが



村国山(芦山公園)案内図

あるが、このような行為は公園の改良でなく改善というものである」などである。こうした記述は、初期の設計書の中にはみられなかったものである。



紅葉が美しい夫婦池。「説明書」の中ではモミヂ谷と記された所にあり、当時は「愛山池」と呼んでいた



野趣に富んだ園内の遊歩道

設計当初の面影を伝える芦山公園、市民の健康づくりの場に

芦山公園は市街地に隣接した自然豊かな公園である。上空写真で見ると、海上に浮かんだ島のように見える。公園は標高二百三十八メートルの村国山の北側の半分をしめ、入口は北側の白山神社側と日野川沿いの西側にある。神社側の入口付近に小さな看板で「芦山公園」とあるが、よほど気をつけて見付けないと見過ごしてしまう。市内に住むご夫妻に公園の場所を尋ねた時も、「芦山公園」ではわからず、村国山でやっとわかったほどである。「桜の時期はきれいだけど、何もないとこですよ」というのが夫妻の共通した意見であった。

午前中、紅葉真っ只中の公園に足を踏み入れた。あらかじめ市役所から送って頂いた公園の平面図と、『説明書』にある地図（14頁参照）とを比較しながら、約二時間にわたって園内を巡った。山あり、谷あり、池ありと、地形の変化に富んだ公園である。実際に歩いてみて初めて、本多静六が「この公園は山と谷と眺望と樹林が特徴」といったことがよくわかる。

最初に園内の自動車道を、次に遊歩道を歩いてみる。どちらの道路も大正時代の設計に基づいて造られたことが踏査して分かった。遊歩道は歩く人が少ないためか、少々荒れた所もあったが、概ねよく整備されていた。ただし案内図や標識が極端に少ないので、通いながれた地元の人でないとは何処に行き着くのかわからない。せ

めて入口付近に園内の案内図でもあれば、初めて訪れた者には助かるのだが……。紅葉真っ盛り、落ち葉を敷き詰めた遊歩道は気持ち良く、眺めの良さも手伝って、至福の時を過ごさせてくれる。

高低差のある遊歩道を歩いていると、意外にもお年寄りによくすれ違った。皆さん「おはようございます」と気軽に声を掛けてくれる。ウォーキングを楽しんでいる方、おしゃべりに興じている方、紅葉を愛でている方など様々である。結構きつい登り坂も慣れた足取りで力強く進んでいく。公園について二、三問い掛けると、殆の方から「ここでの散歩を日課にしています」という答えが返ってきた。

芦山公園の、本多静六の設計の中で一番の目玉は公園入口近くにある「夫婦池」である。『説明書』の中では「モミヂ谷」として記されているが、文字通り、一際紅葉の美しい場所である。川の流れを堰き止めて、二つの池を造ったものである。開園当時は、土地の寄贈者である山本甚右衛門の雅号をとって「愛山池」といったそうだが、現在は「夫婦池」となっている。

園内を歩いて感心したのは、公園の西側の遊歩道に沿ってある樹木に、樹木名の表札が掛かっていたことである。設計当初の方針が受け継がれているのか定かでないが嬉しい発見である。それとも一つ、「村国山を守る会悠々会」という団体によって公園の自然が守られていることである。本多静六は公園設計の最後に、必



武生駅のホームから望む芦山公園(村国山)

ず公園保勝会の設立を提言しているが、まさにその趣旨に沿った会が存在していたのである。地元民に愛されている証拠である。

武生駅のホームから、線路沿いに並んだ看板越しに芦山公園の全景を望むことができる。看板には「ようこそ越前市へ」の大きな文字と共に、「越前おろしそば」「花筐公園」、「紫式部公園」の三つの大きな写真が観光客に越前名物をアピールしている。五十年前であれば、間違いなく「芦山公園」もその中の一つに収まっていたであろう。やはり時代の流れか、ふと寂しい思いがした。

新聞からは発見できなかった芦山公園。今回の本多静六の公園調査の一環として、当時の地方新聞に的を絞り調査した。他の公園の場合、本多静六の来県や調査時の様子を新聞記事でみる事が多かったからである。

そこで、越前市立図書館において、大正十三年十月から、公園の設計書ができた大正十四年十二月までの「福井新聞」を調査した。大正十三年からしたのは、大正期のものとしてはこの年月が最も古かったからである。何日分が欠落していたが、新聞は六巻にわたってマイクロフィルム化されていたため、リーダープリンターを使っての閲覧となった。四時間近くにわたって丹念に新聞記事を調べたが、残念ながら、芦山公園に関連した記事を発見することはできなかった。

郷土史資料に残る芦山公園の記録

『丹南史料研究第六集 たけふ歴史探訪 下巻』(平成十七年四月、斎藤嘉造著、丹南史料研究会)に次のような記載がある。

「芦山公園 村国山の北西部にある。大正十三年(一九二四)に蚊帳製造業で産を成した山本甚右衛門が武生町に公園用地として寄付したもので、面積は十三町二反四畝(三十四・八ヘクタール) 林学博士本多静六(日本の近代的公園設計の第一人者、昭和二十六年没八十五歳)が設計した自然を多く取り入れた公園である。

市民の憩いの場としてよく利用され、山頂近

くまで車で通行可能であり、駐車場もある。

芦山公園 春なら桜 秋は紅葉 色のよさ

野口雨情

まばらにも 越の武生の灯の浮ぶ 村国山の

しののめの霧

与謝野晶子

次に『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和』(昭和五十五年八月三十日、株国書刊行会)には六枚の写真に次のようなキャプションが記されている(14頁下段参照)。

「村国山で慰労会 昭和四年四月、福井県料理組合連合会総会が武生町で開催されたが、その慰労会が四月十九日公園広場で行なわれた」。「村国山で慰労会 総社の祭礼の後、有明町の青年会が芸妓を連れて慰労の山行きである。昭和二十年代の写真で、妻わらのかんかん帽子や一升徳利が懐かしい」。「村国山で演芸大会 舞台の上に『花かえまつり四月十日』二十一日演芸大会」の看板が見られる。昭和三十年代の山の中腹広場の春の賑わいである。「芦山公園遠望 中国の揚子江と鄱陽湖に臨む名山芦山に似ているので名づけたという。村国山の一部である。深山幽谷の美と河川の美を兼ねた公園で古くから市民の行楽の地である」。「村国山スキー場 昭和初期の光景である。冬場は終日子供の歓声が賑わった」。「芦山公園愛山池 公園の敷地十三万平方メートル(約四万坪)は、武生市内の実業家 山本甚右衛門氏が、大正十一年に市へ寄贈したものである。公園にある池

は山本氏の雅号により愛山池と称した。また池が二つに分かれているので、夫婦池とも呼ばれた。

これらの資料からも、芦山公園が大正時代から昭和三十年代にかけて、子供からお年寄りまで実に多くの市民に愛され、親しまれていたかわかる。

公園用地を寄贈した山本甚右衛門と本多静六の予期せぬ類似点

この公園の用地を武生町に寄贈した山本甚右衛門については、『武生市史 資料編 人物・系譜・金石文』（昭和四十一年十二月三十日 武生市役所）に詳しく記されている。その人物像が本多静六と実によく似ていることに驚く。

山本甚右衛門は、隠居後の名前であり、現役の時は甚三郎といい、雅号を愛山といった。明治元年（一八六八）三月四日生まれで昭和二十六年十二月三日に、享年八十四歳で亡くなっている。奇しくも生没年は本多静六と殆ど同じである。

山本は明治二十五年（一八九二）、二十五歳の時に家督を継ぎ、家業の蚊帳製造を業とした。その後は事業も順調に拡大成長し、会社を興し自ら社長となる傍ら、大正九年には第五十七銀行の頭取にもなった。大正十一年に村国山麓約七万町歩（二十二万平方メートル）を武生町に寄附し、芦山公園を造った。また同十二年には一万四千元を武生町に寄附し町立図書館を建設

した。さらに第二次世界大戦の時には戦車一台、軍用飛行機七機を軍に献納するなど、かつて類を見ない偉業を成し遂げた人物であった。

性格は誠実勤勉で、しかも積極性に富み、常に蚊帳業界の先頭に立って働いた。新しい製法を発明しても、あえて実用新案特許はとらず、広く業界に普及することを計ったという。また人の面倒見がよく、養老院や孤児院等をしばしば慰問したという。

特に本多静六と似た性分と思われるのを紹介するに相応しい逸話は次の一文である。

「彼はよく商用などで旅行をしたが、汽車は必ず三等を用い、旅館も上等には泊まらず、タクシーなども出来るだけ利用しなかった。しかしこれは単なる節約ではなく、旅行が終わって武生に帰る毎に、一等旅費との差額、上流旅館の宿料との差額、タクシーの節約代などの合計を郵便貯金とし、年末にその貯金の全額を払い戻して、社会施設に寄贈することを例としていた。彼はまた資性寛容闊達、包容力も豊かであったが、自己に対してはすこぶる謹厳であった。生来蒲柳の質であったが、常に摂生に留意し、早寝早起き、禁酒禁煙を厳守した。その規則正しい日常生活は到底常人の出来ないことであった。元来繊弱の身でありながら、よく八十四歳の天寿を完つした所以である。」

この一文が山本甚右衛門の人となりをよく表わしている。山本の偉業を称え、今に伝える銅像が越前市役所の前庭に、今も威風堂々と建っ

ている。



公園内の遊歩道を散歩する近所のお年寄りの皆さん



市民に守り育てられている芦山公園

結びにかえて

「芦山公園」は今も市民の憩いの場として息づいている。四季折々に美しい自然景観をみせるこの公園には、「息づく」という言葉が相応しい。野口雨情や与謝野晶子の歌にも詠われた名公園である。

ここ数年、本多静六設計の公園を巡り歩いていると、歴史の重みと共に、一時期の華やかな時を通り過ぎて、静かな時を迎えているという、一抹の侘しさを感ずる時がある。時代の流れと言つてしまえばそれまでだが、何とか設計当時の住民が持つていた熱意や地域発展の意欲を、現在のまちづくりに活かせないものだろうかと思つてしまふ。ともあれ芦山公園は、越前市の町づくりの原点の一つともいえるものである。

本多静六の設計した公園には、桜の名所として知られる場所が多いが本公園もその一つである(13頁参照)。本通信が刊行される頃には、芦山公園の桜も見頃を迎えているであらう。

『福井県武生芦山公園設計図及説明書』

最後に、本多静六が著した『福井県武生芦山公園設計図及説明書』の要約したものを掲載し、芦山公園調査報告の結びとしたい。

・緒言

地方大公園の設計にあつては、学は広汎、技は至高を要する。即ち、その地方の経済状態、人情、風俗、習慣、名所、旧跡、歴史、伝説、山水自然の環境、既存の風景に精通すると同時に、一般民衆の要求を知悉することが必要である。然るに今次、芦山公園の設計にあたり招聘を受けたが、初めて来た

土地なのでそれらに関する予備知識がなく、甚だ心苦しいところであつたが、町長三田基三郎氏、助役長尾権四郎氏、及び山本基三郎氏その他有志の方々の説明・案内により、鯖江、粟田郡の両地方を实地視察し、かつ本公園予定地の内外を踏査した結果、ここに本稿を草するに至つた。しかし日時が短く十分な調査が行なえなかつたので、本案はその計画の大体方針を示したものに過ぎない。これを実行に当たる際は、更に各局部を精査実測のうえ多少の変更を要するものもあると思われる。そこで先ず前論において森林公園の必要性とその設備とを明らかにし、次いで本論において芦山公園設計の具体案について論じたい。

・前論 森林公園の必要と其の設備

近代文化生活の基調は「独立自強」であり、個人国家を問わず他人の世話にも他国の世話にもならず、自らの始末をなし、合理的に幸福に生活していく必要を自覚した。独立自強の実現には身体の健全を第一に置かなければならないと思ひ至つた。そして健康第一主義の実現には、絶えず新鮮な空気を呼吸し、十分な日光に浴し、食物を美味しく食べるといふ三点に帰着した。そのためには野外活動若しくは野外生活が最も適當であることを自覚するに至つた。

一方、今日都市文化の弊害として空気が汚濁し黄塵万丈なる市街地に生活する者の増加と、機械工業の発達は、ますます機械化不自然化になり、精神病者及び病弱者が増加したため、市民はときどき野外生活をなし心身の保養をしなければ、その健康を維持することができなくなつた結果、ここに森林公園の増設大拡張が必要となつたものである。

しかし多数民衆の用に供する大公園は容易に市中又は市の周辺に造ることはできず、汽車、電車、自転車、自動車等、各交通機関の発達に伴ひ、速やかに遠距離の往復が出来るようになったので、広大な山水風景に接することを臨むに至つた。従つて市

街地付近の森林は勿論、山水風景に富める森林は公園的に利用することとなり、ついに森林公園、国立公園の普及発達を促し、特に市街地又は温泉地付近の山林の如きは、殆どみな森林公園として利用されるに至つたのである。

森林公園の森林は如何に取り扱うについては、その自然の山水美を十分に發揮させ、その市の風致風景上あるいは市民の運動娯楽静養上に役立つよう森林事業を經營すべきものであり、全く風致に關係ない場所、あるいは場所が行くことができず、見ることができないような場所は、普通の山林事業と同じ取扱とする。また市街から見えない森林中でも、散歩する道路から見える場所は風景を助長すべき樹木を選んで混植し、散歩道の両側には多少公園的施設を整えるようにする。混植、補植すべき樹木は自生しているように植えるのを原則とする。つまり、「森林公園は道路と建物の他は、一切人為を加へたことを感じさせないようにすべきである」といわれている。

次に公園内の道路については、人力車道においては幅一間半以上、馬車・自動車道では幅二間半以上とし、容易に築造できる平坦地、原野等においては三、四間幅とし、中央十五尺のみに砂利を敷きそれ以外は芝地としておくのが良い。散歩道については車道のように決して一定の幅を持たせてはいけない。近年、各地の公園設計をみるとややもすると歩道によつてせつ々かの公園を著しく悪化させているものがある。つまり公園内の歩道は大体において幅三、六尺、人込みの所で九尺、二、三間とすれば十分である。また谷川の景色よい場所等は両側に歩道を造り、その所の名称、來歴などを簡単に書いた札を立てる。一般に森林公園内の歩道の橋は土橋、丸太橋とし、質素風流なものとする。なお一般に道路の危険な場所には丈夫な駒寄せ又は手摺を造る。また公園内の道路は直線に曲がることは禁物であり、自然の地勢に應じて自然に曲がつて造るのを良とする。道路は長いほどその公園を広く見せるものである。走蛇形の曲線道路は、光線に対する方向も変え

るため色彩の変化を生じ、景色の単調を破るなどの効果もある。

次に公園内の道路の両側は、三丁二、三十間は下草をよく刈り、風景に利する樹木草花だけを残して置く。これを「藪の刈り出し」といい、年に三、六七回行えば美しい下木と下草だけとなり草生地は刈り込んだ芝生のように初めに公園林らしくなる。多くの地方公園の中には森の下を掘り起こし地面を裸にし、日陰の用をなしている樹木を伐採してその代わりに小さい桜や楓を列状に植えていくところがあるが、このような行為は公園の改良でなく改悪というものである。なお、公園内においてこちらの道路から向こう側の道路が見渡せるのは禁物であり、その場合はその間に藪を自然的に残すか、灌木を植え、互いの道路が見通しできないようにしなければいけない。また山道の曲がり角には灌木類を植え、突っ切り道が出来るの防ぐことが必要である。突っ切り道は公園荒廃の原因となるものである。

同じ森林風景がどこまでも続くのは面白くない。自然の要素に適応して森林美を変化させることが必要である。各局部に特徴を發揮させる必要がある。たとえばサクラの名所とする区域にはこれを補植する場合、サクラ七分、マツ、モミジその他の花木三分の割合とし、モミジ谷にはモミジ七分、マツ、サクラ類三分とする。

道の広い所、涼しい木の下、眺望の良い所には腰掛を置く。この腰掛も森林の中では自然的なものを可とし、倒れた大木を荒削りのまま、あるいは枯れ木の根株を削って利用するとよい。時には枯れ木、倒木を運んで来て自然らしく置くのもよい。岩石の多い場所では、その岩をきれいに洗い出し、尖った所は目立たないように石屋に削られれば、天然の石造腰掛を至る所に置くことができる。なお、腰掛にペンキ塗り鉄製のものは禁物である。鉄の腰掛は如何にも不自然で人間が設置したことが明らかで、甚だしくも自然の風致を俗化する。フランスの思想家ルソーは、「自然の成せるものは総て美なり、人間の手に依りて汚損す」といっており、森林公園の原

則もまたこの一言に帰すものである。

次に眺望のよい場所には「見透かし」を造る。この見透かしは外部からはどこに人がいるか分からないが、内部からはよく見えるようにし、適当な場所に腰掛を置く。一般歩道においても、自然に林に隙がある所には見透かしを造って、いわゆる見透かし出没のようにする。

次に森林公園には水面のない場所が多いので、幸いに溪流や瀑布があれば、これらを十分に活用すべきである。場所によっては溪流を溜めて小さい淵を造り、又は自然風の湖水を造り魚類を放して繁殖させてもよい。こうして森林公園は総て禁猟区として、キジ、ヤマドリ、シカ、サル、その他の鳥獣を繁殖させ、これに餌を与え馴らして、林内を散歩するときシカ、サルを供のようにすれば更に面白い。

次に主要な分れ道には案内板を設置して、初めての人でも案内人なしで安心して遊べるよう親切丁寧にする。公園の入り口には大きな図を設置して、散歩には点線の所を行くようにとする。

次に歩くに喉が渴くので、路傍に湧き出る水は悉くこれを利用する。谷から出る水もきれいな岩間等に溜めて、あたかもその岩から流れ出ているようにし、顔手足などを洗えるようにする。特に水質良好な水は「この水はかくかくの性質なので飲んでも差し支えない」と書き、コップを添えるといふ。また所々に東屋を設け、その中に腰掛を置いて平時は休憩所にし、にわか雨の際などは雨宿りの場所とするを便利である。

次に森林公園の中でも特に眺望または風景のよい所は茶屋を設ける必要がある。ただしこの茶屋は風景を楽しむのに妨げとならない場所を選ぶ必要がある。見事な滝の前などに崖に接して茶屋があれば滝を見るために店で休まなければならぬ。従って茶代を払うことを余儀なくされ不愉快な思いをするのも少なくない。そのため茶屋は滝の観覧に差し支えないよう少し後方に造らせ、物価表を掲げさせ希望の人のみならず休むようにする。

以上のほか、森林公園には眺望台、天然植物園、

養魚場、花卉園、便所などが必要であるが、それは本論の設計案の中で述べる。

・本論 芦山公園設計案

芦山公園は、武生町の東方、日野川を隔ててある村国山の北半分、海拔二九三mの山頂より北方に傾斜地を占める。別名「村国山公園」ともいう。芦山公園の名前は、山にある「長魯山興禅寺」に由来するもので、思うに中国の揚子江にある有名な避暑地「芦山」に因むものと思われる。

面積は約十二万坪(三九六km)で一部にスギ、マツ、又は雑木の高木があるが、大部分は伐採後わずか数年を経た雑木林で、局部的にクリの果樹園、寺院、神社がある。また谷間には荒廃したわずかな畑跡地があるが、大部分は山岳地である。

つまり、この公園は山と谷と眺望と樹林が特徴となっており、遊覧地に適した土地といえる。公園の設計は二期に分けて説明したい。

・甲 第一期の計画

本公園の道路は、自動車大回遊線(自動車道)と散歩道(歩道)に大別し、相互に交叉連絡して園内を回遊できるようにする。自動車道は幅一間半から二間半とし、歩道は幅二、三尺から五、六尺の大小広狭なものとす。

・其の一 公園道路

(1) 神明神社側の公園入口から興禅寺に至る本道を幅二間半の自動車道とする。

(2) 今回計画した神社側の見晴台から忠魂碑を経て観音堂に至り、更に興禅寺に下る山道を緩やかな勾配の幅三、五尺の歩道を整備し、両側にヤマザクラを植栽する。

(3) 蛇谷下の養魚場のある場所から斜めに大谷を経て忠魂碑に至り、更に山腹を迂回して興禅寺石段下に出て谷を渡り、水押下の低地を経て寺本道の自動車道に至る、幅三、五尺の歩道を造る。この勾配は十五分の一とし、二期計画で拡張し自動車道とする。

- (4) (1)の自動車道から分かれて弁慶岩を過ぎ、其次右衛門山の峰に出て、峰に沿って三角点、城跡、観音堂に至り、(2)の道路に合流する幅二、四尺の道を「芦山大回遊道路」と称する。
- (5) 万代橋に近い地蔵のある所に新たに公園入口を設け、幅二、三尺の歩道を造る。(3)の将来の自動車道を横切り、蛇谷を上り城跡に至るものとする。
- (6) ナノキ谷の下の自動車回し広場から谷沿いに上り、スギ林、果樹園、鴻ヶ巣を経て三角点に至る歩道は幅二、四尺とする。
- (7) 前記「芦山大回遊道路」より更に、三角点付近から峰沿いに帆山に下る歩道、矢放村に下る歩道、鳥越峰より大屋村に至る歩道を新設する。幅は二、四尺とし、共に各村の青年団の労力により施工することが可能である。
- (8) 神明神社境内から保安林内を通過し、将来、植物園とする場所を経て、(3)の道に交わり、更ら上って観音堂に達する幅二、四尺の歩道を新設する。

・其二 各局部の設備

- (1) 村園見晴台広場 忠魂碑広場及び観音堂には現在の樹木のほか、マツ、サクラを補植し、樹下に腰掛を配して眺望に訪れた人に供する。各広場のサクラは生長の早いソメイヨシノかヤマザクラを混植するものもよい。(一線筆者、14頁参照)
- (2) 弁慶岩と下方にある小滝を利用するため、弁慶岩下方のスギ林の中に幅二、四尺の歩道を造り、滝の下に三、四間四方の広場を設け、腰掛を二、三個置く。
- (3) 滝を上って興禅寺に至る谷間に三段位の堰堤を築いて堰き止め、水景を出現させる。池は鯉魚場にして、池の周囲には幅四、五尺の歩道兼用の堤を築き、緑陰樹を植栽して弥次右衛門山に至る道と連絡させる。
- (4) 大池の上方の平坦な場所は駐車場と花園とに利用する。一部に釣堀を造るものもよい。
- (5) 神明神社境内、保安林及びその上方の(3)の道下に至る部分を「天然植物園」とする。この地方固有の植物とし、足りないものは補植する。樹木には和名、方言、ラテン語(学名)を記した札をつける。また林内には数坪の空地を設け、腰掛を配して、児童の校外授業等に供し、自然の中で正確な知識を得させるようにする。この一帯の道を「植物園道」と称する。
- (6) 水押の下方又スト谷を中心とする一帯を「鹿園」とする。将来的には狐、狸、熊等の野獣を飼い、又は雉、山鳥等を放養して「天然動物園」とする。
- (7) 鹿園より上方、谷に沿って現在スギ林のある場所が地形が緩斜で夏は涼しいので、下草を刈り取り一尺ずつの階段状にし、このまま夏季林間学校の講義場所とする。
- (8) 夏季林間学校敷地の上方、現在のクリ林一帯を「果樹園」とする。果樹はクリのほか、この地方でよく生育するカキ、モモ、ナシ、アンズ、ビワ、イチジク、ウメ等とし、管理人を置いて新鮮な果実を客に安く販売する。
- (9) 三角点、城跡、鳥越峰、弥次右衛門山頂はいずれも眺望が良いので、これらの場所に見晴台を新設する。三角点地は芦山公園中一番高い場所なので、強風に耐える丈夫な東屋を設け、天井裏にパノラマ式図を描き、自然地理の学習に供する。弥次右衛門山にも簡単瀟洒な東屋を設ける。
- (10) 便所は道路、広場等の縁辺に設け、植え込みその他をもつて一般通行人から見えないようにし、立て札でその位置を示す。植え込み樹木はカシ、シイ、カナメ、ウバメカシ、モチ、ネズミモチ、ヒサカキ、スギ、サワラ、イヌツゲ、ツガ、アオキ、キコク等が適当である。
- (11) 理想的には、公園内の適当な場所に東屋式の無料休憩所を設け、簡単な有料又は無料の喫茶設備を設けるとよい。そして園内数箇所に町監督下の安全な飲食店、喫茶店を設け、簡単な昼食

(12) や休憩が出来るようにするとよい。北入口と西入口に鳥瞰図式の彩色した公園の図を掲げ、遊覧者の便に供し、園内の主要な分岐点には案内板を立てる。また公園内に注意書きの看板を立てる際は、その文面はよく考えなければならず、特に命令禁止的な言葉は避け、民衆に対して相談的な言葉とすべきである。

・其三 樹林と改良手入

- (一) 現存する鳥越のマツ、スギ、ヒノキ林、及び水押上部のスギ林は、普通経済的林業の取り扱いとし、人工林の森林美を發揮できるようにする。つまり道沿いの部分を風致林的に取り扱う他は、林内の大部分は適宜間伐し、下枝刈り払い等の手入れを行なう。将来的に二段林の形状を導き、一度に伐採することなく経済的に利用する方法をとるべきである。
- (二) 武生町に面する蛇谷、大谷一帯の地は、現在の雑木林の手入れ助長し、マツ、ヤマザクラ、ヒカンサクラ、モミチその他花木紅葉樹を主とする一大風致林とする。総じて山、道沿いに植えるサクラはヤマザクラ、ヒガンサクラとし、広場、見晴台などに植えるのはサトザクラ(ソメイヨシノ若しくはヤエザクラ)とする。
- (三) 新大池を中心とする両側の谷一帯を「モミチ谷」とし、モミチ類を補植し、五割以上を紅葉樹とする。但しマツとヤマザクラを一、二分ずつ混植すること。
- (四) 観音堂から天然植物園の上方、紅葉谷の反対側一帯にヤマザクラを粗く補植し、マツ、モミチ三割位を混ぜて「サクラ山」とする。
- (五) 鳥越、果樹園下方のスギ林は一部を林間学校に、間伐を行い普通林業の取り扱いとすることは前述のとおり。
- (六) 三角点を中心とする峰通り一帯はマツを補植して「マツ林」とする。
- (七) 弥次右衛門山を中心とし、モミチ谷の上部峰沿い及び新歩道の丘を「ツツジ岡」とし、道の上下二、十間の間はツツジを補植する。

- (ト) ツツジ岡の南方峰通り一帯はハギを補植して「ハギの名所」とする。
 - (チ) 大谷、蛇谷、観音堂付近にはヤマブキが自生しているのを、これを利用して「ヤマブキの名所」とする。
 - (リ) 果樹園内の下方一帯に梅林を仕立て、「梅花鑑賞の地」とする。
 - (ヌ) 果樹園内の一部に桃林を造り、「桃園」とする。
 - ・ 其の四 大運動場
- 現在、武生町には町民一般が利用できる運動場がない。芦山公園の設計に際して運動場の敷地を予定することは当然かつ緊要の問題である。しかし芦山公園は丘陵地なので運動場は公園外に求めるしかない。つまり万代橋付近の日野川は上下とも河原が広まっているので、河場工事をして設計図のように改築すれば、ここに容易に大運動場を新設することができる。直線走路二百m、一周四百mトラックはもとより、内部では各種フィールド競技、テニス、バスケットボールも行なえ、周囲には観客席を設けることもできる。これとは別に長さ五十m、幅十二mの水泳場を設ける。
- ・ 乙 第二期の計画
- (一) 第一期計画中の(二)(三)の歩道を自動車道に改造し、興禅寺下にて(一)と連絡させる回遊自動車道とする。
 - (二) 花園より鴻ヶ巣谷の歩道を改造して、果樹園、スギ林内を迂回して鳥越南峰の眺望台に出て、更に矢放村に通じる自動車道を新築する。

芦山公園設計図
(大正14年12月)
越前市立図書館蔵



本多静六と桜の名所

本多静六は公園の設計にあたり桜の木を多く植栽する傾向にあったことがこれまでの設計書からもわかっている。本多静六設計による桜の有名な公園としては、鶴ヶ城公園（福島県）、懐古園（長野県）、養老公園（岐阜県）、大宮公園（埼玉県）などがある。

『ふるさとの思い出写真集
明治大正昭和』
(昭和55年8月(株)国書刊行会)より



村国山で演芸大会（昭和30年代）



村国山で慰労会Ⅱ（昭和20年代）

小学生の社会科副読本に 「郷土の偉人 本多静六」 を掲載

菖蒲町では、本多静六の功績を称え、平成四
年に名誉町民の称号を贈り、顕彰事業に取り組
み始めました。これは本多静六の業績を広く町
内外に紹介すると共に、無理・無駄のない合理
的な考え方をまちづくりに反映させることを目
的としたものです。

その顕彰事業の一環として、小学生向け冊子
を発行して各学校に配布するなど、学校教育へ
の働きかけも行ってきました。しかし、各学校
の事情等もあり、その冊子を授業で活用してい
ただくまでには至りませんでした。

そこで今回は、町の小学校で使われている社
会科副読本が平成十九年度に改定されるのを機
に、本多静六についてのページを設けていただ
くように、この副読本の編集委員会（町内学校
教員の方々と組織）に要望しました。そうした
ところ、快く受け入れていただき、下記のペー
ジを掲載していただくこととなりました。

ページの作成にあたっては、顕彰事業を担当
する役場総合政策課で案を作成し、編集委員の
先生方に小学生向けに手直しをしていただきま
した。

この社会科副読本は、町内の小学三・四年生
の授業で使用されます。子どもたちは、この本

を使って、実際に学校の外に出て、直接観察し
たり、調べたり、見学して、自分たちの住む町
のことをさらに深く理解していきます。そして、
その中で、郷土の偉人である本多静六のことも
知ることになります。
すでに、本多静六の母校にあたる三箇小学校
では、三年生から総合的な学習の時間で、本多

静六について学ぶ取り組みを行っています。今
後、他の学校でもこつとした取り組みが始まれば、
学校教育における本多静六の位置付けが確立さ
れていくことでしょう。そして、一人でも多く
の子どもたちが、本多静六の生き方から何かを
学び取っていくことを願います。



郷土の偉人

本多 静六

日本最初の林学博士・日本の公園の父

慶応2年(1866)～昭和27年(1952)没。

折原家の六男として河原井村（現在の菖蒲町）に生まれる。父親が亡くなり、貧しい生活の中で育つ。

明治23年（1890）東京帝大農科大学林学科（現在の東京大学農学部）を優秀な成績で卒業する。卒業時に本多家から望まれ、本多家を継ぐ。（「埼玉の偉人たち」から要約）

◆日本の公園の父

明治36年（1903）日比谷公園の設計を最初に、約35年間にわたり、東京の日比谷公園・埼玉の大宮公園など、全国各地の公園の設計を手がけました。その数は数百にもなることから、「日本の公園の父」と呼ばれるようになったそうです。

◆日本最初の林学博士

明治32年（1899）日本で最初の林学博士となりました。その業績は、いろいろな方面に及んでいます。国立公園・国立公園などの自然公園を創設したり、造林学・造園学などの確立に大きな足跡を残しました。

◆人生は努力、努力なしでは幸福にはなれない

本多静六は、あらゆる人生の困難に打ち勝って、大成功をおさめています。長い生涯を通じて、「人生はすべて努力だ、努力なしでは幸福にはなれない」ということを身をもって示してくれました。

人生即努力
努力即幸福

『日本の公園の父 本多静六』菖蒲町本多静六顕彰事業実行委員会編集より引用

社会科副読本に新たに加わる本多静六のページ

自伝や人生論など
本多静六著書続々と出版（復刊）



生涯に370余冊の著書を残した本多静六

最近出版された本多静六関連書籍

タイトル	著者	発行年月日	出版社	備考
『財運はこうしてつかめ』 新装普及版	本多静六	2004.9	致知出版	解説 渡部昇一
『私の財産告白』 新装版	本多静六	2005.7	実業之日本社	解説 岡本吏郎
『私の生活流儀』 新装版	本多静六	2005.7	実業之日本社	解説 渡部昇一
『人生計画の立て方』 新装版	本多静六	2005.7	実業之日本社	解説 本田 健
『お金・仕事に満足し、人の信頼を得る法』	本多静六	2005.9	三笠書房	『自分を生かす人生』を再編集改題
『本多静六自伝 体験八十五年』	本多静六	2006.2	実業之日本社	解説 神田昌典
『本多静六 人生を豊かにする言葉』	本多静六	2006.5	イーストプレス	解説 池田 光
『本多静六のようになりたいなら、その秘訣を公開しよう』	本多静六	2006.10	三笠書房	『私の体験成功法』を底本に再編集
『本多静六 日本の森林を育てた人』	遠山 益	2006.10	実業之日本社	
『本多静六一日一話 人生成功のヒント366』	本多静六	2006.11	PHP研究所	編者 池田 光

編集後記

諸般の事情で本号の発刊が遅れたことをお詫び致します。

遠山益先生には、広範な視野からヨーロッパの公園と本多の公園設計の本質について御高説を賜りまして有難うございました。

実業之日本社書籍管理部長・編集長岩野裕一氏には、初版から度重なる復刊のご苦労と、急忙を凌ぎ出版界から見た今に生きる本多評を頂き心から敬意と御礼を申し上げます。

十一月下旬、秩父市大滝（旧大滝村）へ取材に行き、知る人ぞ知る中津峡の紅葉にビックリしたり、三十年ぶりの山の飢饉の恩恵か？猪や鹿の肉をご馳走になったり、町に現れた熊が御用となり、大宮公園動物園の人気者になったり、こんな奇縁も本多のお導きか？山の人たちは猿を加えた獣群団の防御に手を焼き尽くし、野菜飢饉も起きているようです。

彩の国ふれあいの森管理事務所で埼玉県所蔵の本多関係資料目録を頂き、保管されている実物も拝見しました。

大血川の東大演習林では、土砂崩壊防備保安の植林が漸く成長し、素晴らしい景観を構成していました。

各位から記念する会、本通信に関するご意見、助言をお待ち致しております。

【編集発行】本多静六博士を記念する会
〒346 0192

埼玉県南埼玉郡菟浦町大字新堀38番地
菟浦町役場総合政策課内
電話 0480(85)1111(代)
FAX 0480(85)1806